

日本とインドの大学生における英語WTCモデルの比較

○伊藤健彦¹・上市秀雄²

¹法政大学・²筑波大学

¹itotakehiko@hosei.ac.jp

背景

◆Willingness to Communicate (以下WTC) と一般的信頼

- WTC**：ある特定の状況で第二言語を用いて自発的にコミュニケーションをしようとする意思 (八島, 2008)
⇒性格特性は第二言語コミュニケーションの認知・感情を媒介してWTCに影響を与える (MacIntyre & Charos, 1996)
例：開放性が高い人は、第二言語コミュニケーションの自信が高く、その結果として第二言語WTCが高くなる
- 一般的信頼**：一般的に他人は裏切らないであろうという期待の傾向 (山岸, 1998)
⇒日本人の一般的信頼が上昇すると、日本人の英語WTCが上昇する (Ito, 2021)
- 伊藤&上市 (2026)**：日本語母語話者を対象とした調査によって、一般的信頼が高い人は、英会話を上手に行えると思うと同時に、海外への興味・関心が高まる結果、英語コミュニケーションについて積極的になるというモデルを構築した。
⇒このモデルは、あくまで英語が外国語であり、普段の生活では英語を使用しない人々を対象とした調査で作成されたため、普段から英語を第二言語として使用する国の人々まで一般化できるかどうか不明であった。



本研究は、母語の他に第二言語である英語を公用語として普段から使用しているインドの大学生を対象に調査を行い、日本の大学生とのモデルの比較検証を行った。

目的

◆ 先行研究

- 伊藤&上市 (2026) は、日本語母語話者を対象とした調査で、英語におけるWTCモデルを構築した。

◆ 先行研究の問題点

- 普段から英語を第二言語として使用している国の人々にまで、上記のモデルが一般化できるかどうか明らかとなっていない。

本研究の目的：
英語を公用語として普段から使用している
インドの大学生を対象に調査を行い、
日本の大学生のWTCモデルと比較検証を行う。

方法

日本

- 2025年12月～2026年4月に日本の大学で質問紙調査を実施
- 対象：東京都にある大学の学生132名
(男性91名、女性41名。平均年齢 = 19.33、SD = 0.95)

インド

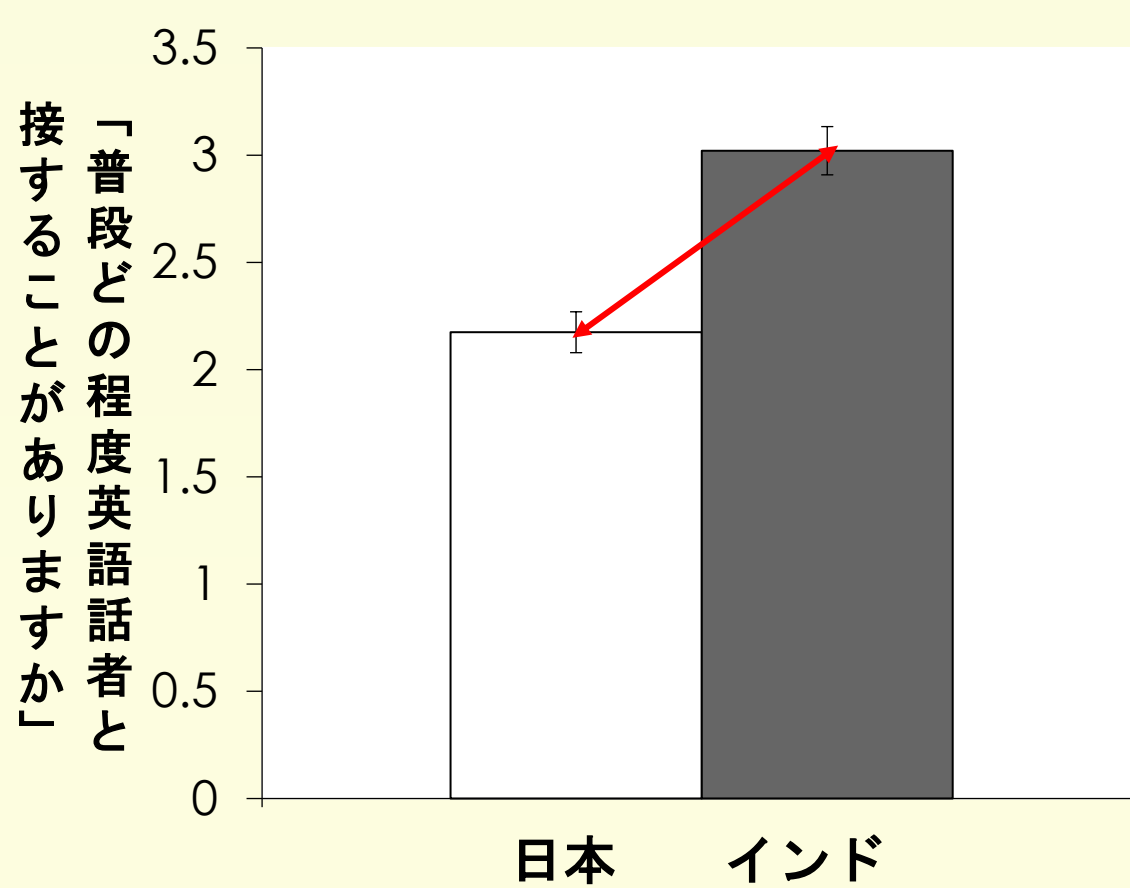
- 2026年1月にインドの大学で質問紙調査を実施
- 対象：北東インドに位置するミゾラム州にある大学の学生97名
(男性40名、女性56名、その他1名。平均年齢 = 22.60、SD = 1.59)

質問項目 (5段階尺度)

- ・WTC37項目 (Ito, 2024; 日本 $\alpha = .98$; インド $\alpha = .99$)
例：パーティーで、同席した人に、趣味について英語で質問する。
- ・英語コミュニケーションの自信37項目 (Ito, 2024; 日本 $\alpha = .98$; インド $\alpha = .99$)
例：学校で、知り合いに、その場の話題についての意見を英語で言う
- ・一般的信頼6項目 (山岸, 1998; 日本 $\alpha = .79$; インド $\alpha = .79$)
例：ほとんどの人は他人を信頼している
- ・国際的志向性22項目 (Yashima, 2002; 日本 $\alpha = .87$; インド $\alpha = .83$)
例：私は、国際的な問題に強い関心をもっている

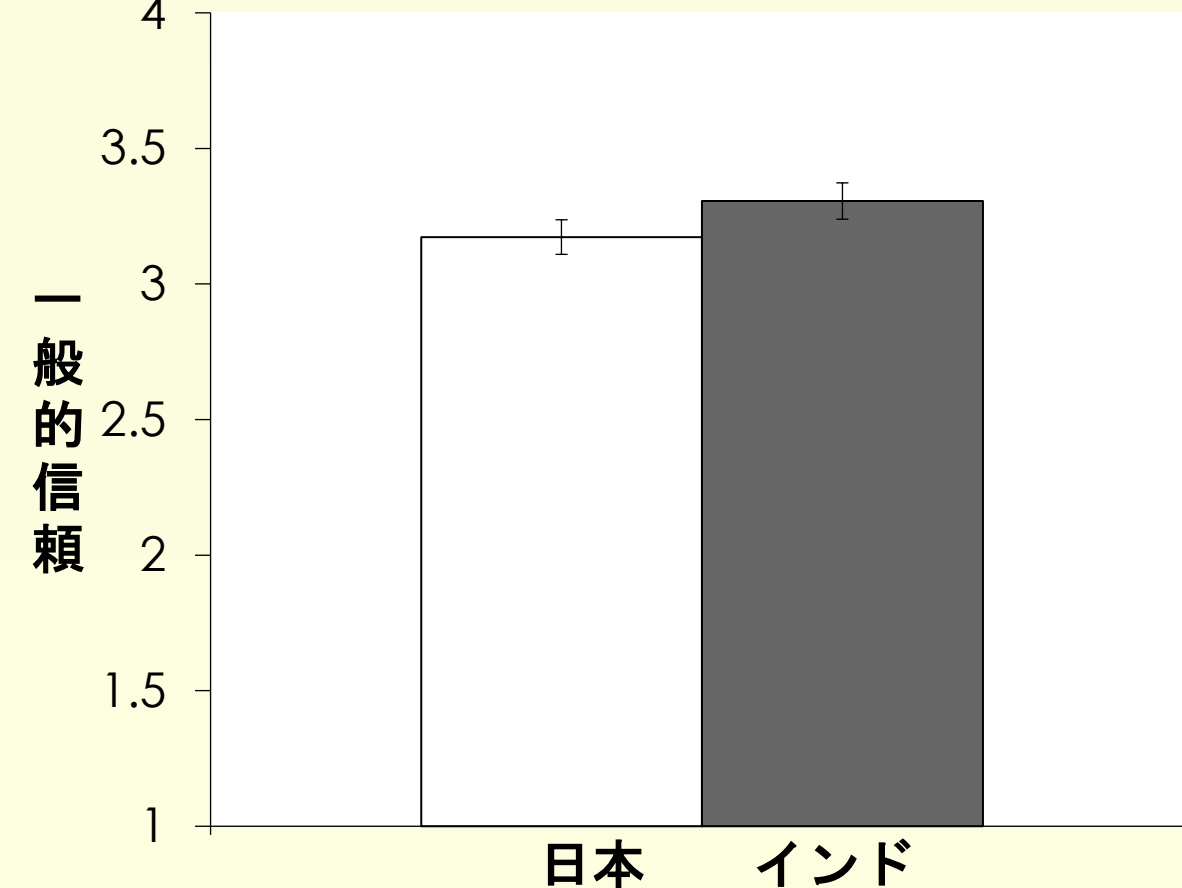
結果

図1 英語話者との接触頻度の日本とインドの比較



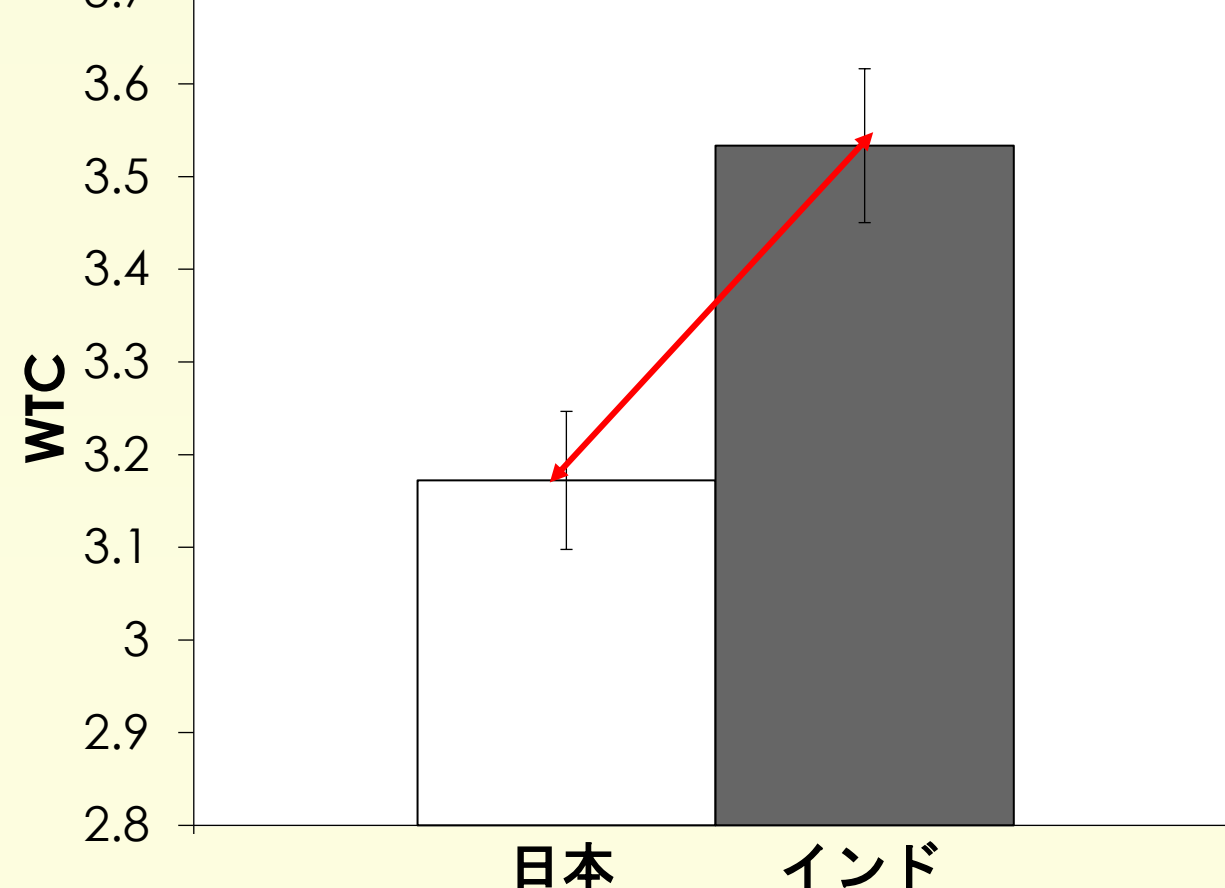
両者の差は有意であった ($t(227) = 5.75, p < .01, d = .77$)
インドの方が日本よりも英語話者と接する機会が多かった。

図2 一般的信頼の日本とインドの比較



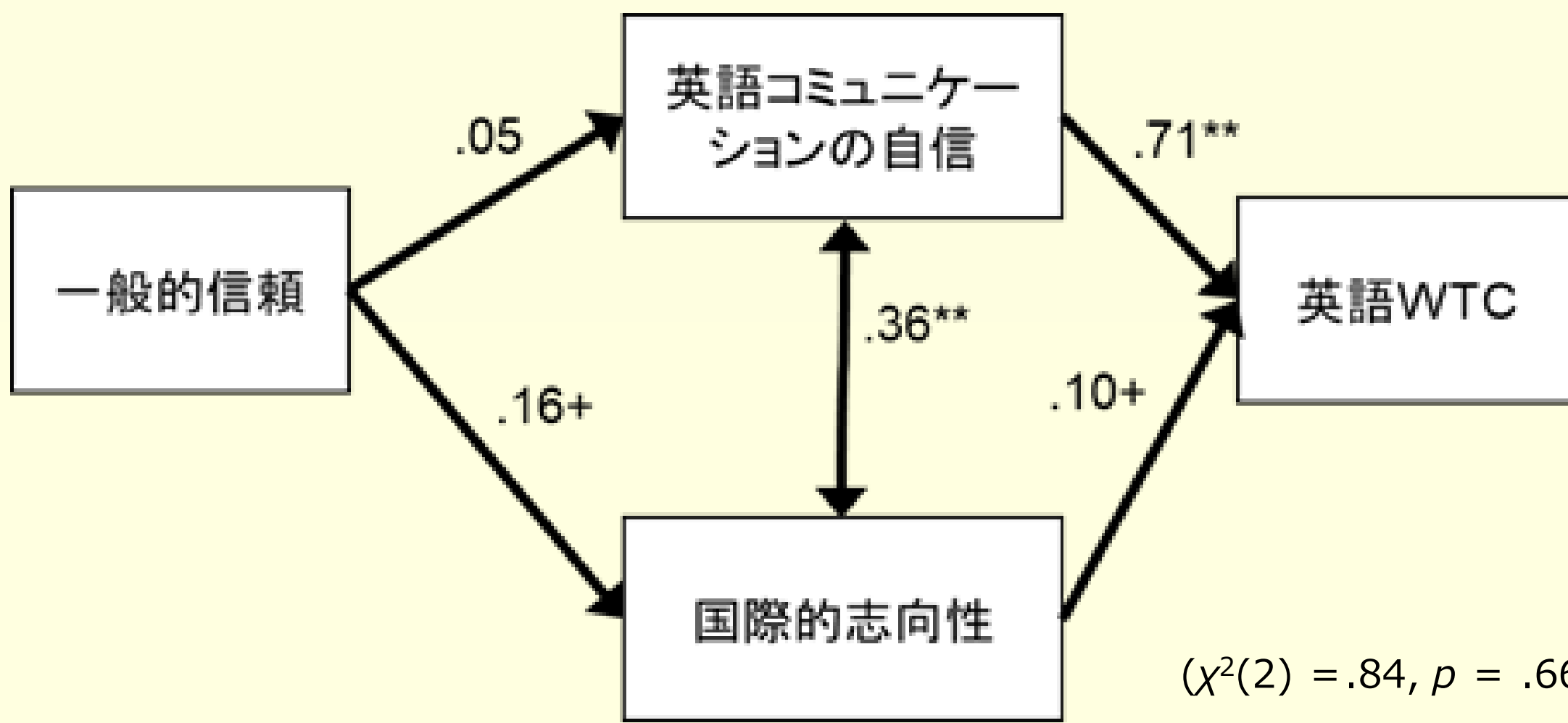
両者の有意差はなかった ($t(227) = 1.41, p = .16, d = .19$)
日本とインドで、一般的信頼の程度に差はなかった。

図3 英語WTCの日本とインドの比較



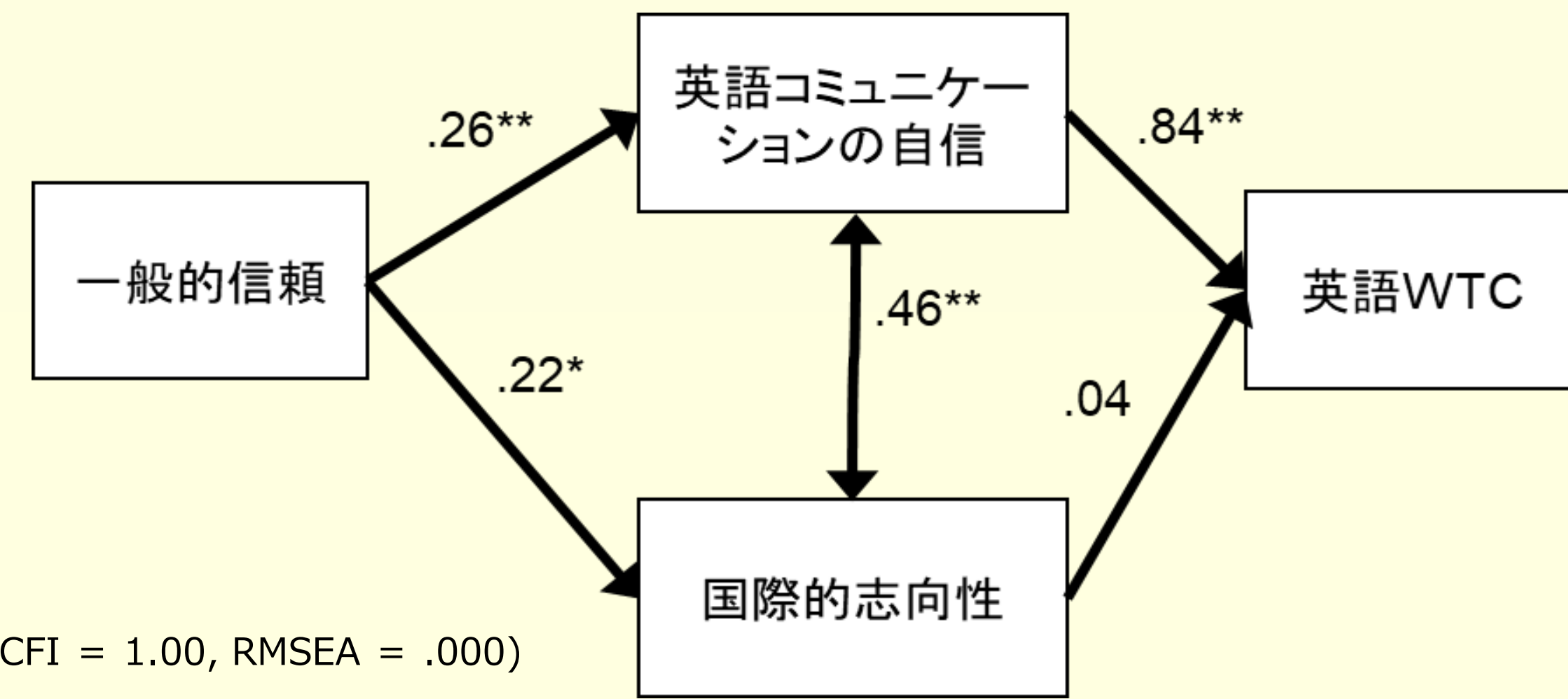
両者の差は有意であった ($t(227) = 3.22, p < .01, d = .43$)
インドの方が日本よりも、英語コミュニケーションの意欲が高かった。

図4 日本の大学生のWTCモデル



日本の大学生では、英語コミュニケーションの自信が、英語WTCに影響していた。

図5 インドの大学生のWTCモデル

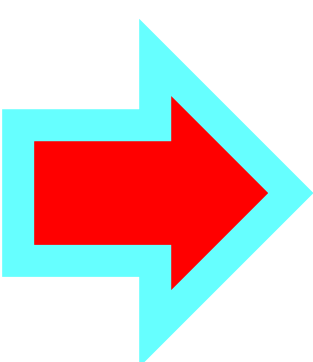


インドの大学生では、一般的信頼が、英会話の自信を媒介して英語WTCに影響していた。

考察

◆第二言語を取り巻く環境によってWTCモデルにおける媒介プロセスが異なる可能性が示された。

- 英語で話す機会が少ない環境：英語コミュニケーション能力に対する自信の有無が、英語WTCに影響する。
- 英語で話す機会が多い環境：他者に対する一般的信頼が低いと、英語WTCが低下する傾向がみられる。
- ⇒英語で話す機会が豊富な人ほど、コミュニケーション相手を選択した上でコミュニケーションを行っている可能性を示唆している。



英語で話す機会が多い学習者に対しては、一般的信頼を考慮した上で、異文化理解やコミュニケーションの促進方法、さらには交流を阻害する要因について検討する必要がある。